

令和8年度入学 看護学部 一般選抜・前期 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	鷺田 清一	哲学の使い方	2014年 pp.63-68 より一部改変	岩波書店

令和 8 年度 一般選抜・前期

看護学部

小論文 (60 分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、3 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(100 点)

ひとが哲学に焦がれるのは、いまのじぶんの道具立てではじぶんがいま直面している問題がうまく解けないときである。なにかこれまでとは違う問い方をしなければ、それももっとほうかつてきな問いのなかに座を移さないと、らちがあかないと感ずるときである。そのために、哲学の書き物を手引きに、レーヴィットもいうように「すべてのものを取って抑えて質問し、懷疑し、探究」しようとする。けれどもこのような思考には、いってみれば大きな肺活量⁽¹⁾が要る。じぶんにとってあたりまえのことに疑い^(A)を向け、他者の意見によってみずからのそれを揉みながら、ああでもない、こうでもない、あくまで論理的に問いを問いつづけるそのプロセスを歩み抜くには、ちょうど無呼吸のまま潜水をしつづけるときのような肺活量[、]が要るのである。あるいは、思考のためといってもいい。さらにそれは、すぐにはわからないことにわからないままつきあう思考の体力といいかえてもいいし、すぐには解消されない葛藤の前でその葛藤に晒されつづける耐性といってもいい。

というのも、個人生活にあっても社会生活にあっても、大事なことほどすぐには答えが出ないからである。いやそもそも答えの出ないことだってある。だから、人生の、あるいは社会の複雑な現実を前にしてわたしたちが紡ぐべき思考というのは、わからないけれどもこれは大事ということを見いだし、そしてそのことに、わからないまま正確に対処することだといってもいい。このことを、3つのまったく異なる場面を例にとって考えてみたい。

まず、政治的な思考について。政治的な判断はきわめて流動的で不確定な状況のなかでなされる。外交政策であれば、それぞれの思惑を測り、いくつかの可能性を想定して、それぞれに手を打つ。しかし、そうした対処じたいが関係国の思惑を刺激し、事態はいつそう複雑になってくる。国内政策であれば、さしあたって不可欠の政策 A と B があるとして——たとえば景気刺激と構造改革という、相反する政策——、いずれを先にするかで A と B のそれぞれの政策としての有効性は大きく変じる。政策が置かれる状況じたいが大きく変化してしまうからである。だから A に先に手をつけるのか、B を先に実行するのか、それを手遅れになることなく決定しなければならない。けれどもいずれが有効か、だれも見通せているわけではない。見通せないけれども決断しなければならないのだ。つまり、結果がわからないまま、わからないことに正確に対応するということが、それが政治的思考にはもとめられる。政治的な思考とは、政略的な駆け引きである以前に、まずは最善の工夫であり、最悪のかいひ⁽²⁾であり、優先度の決定（価値の優先／後置の判断）——これを背後から支える《価値の遠近法》が哲学である——なのであって、ひとはそこで、最終的な「正解」が見えないままに、しかも最上の「確かさ」をもとめて考えつづけなければならないのだ。

次に、ケアの思考である。病院である患者が非常に深刻な病に陥ったとき、そしてどういう治療と看護の方針をとるかというときに、考えは立場によって大きく異なる。医師の立場、看護師の立場、病院のスタッフの立場、患者の家族の立場、そしてなにより患者本人の思いと、さまざまな思いや考えが錯綜する。そのうちだれかの意見をとれば、別のだれかが納得しない。つまりここには正解はない。正解がないままスタッフたちは、ゆうよ⁽³⁾もなしに治療と看護の方針を決めなければならない。

最後に、アートにおける思考。たとえば、制作中の画家には、じぶんが表現しようとおもっているものがじつは何かよくわからない。描きたい、表現したいという衝^{しょうはく}迫だけは明確にあるが、描きたいそれが何であるかはじぶんでもつか^{つか}握めていない。けれども、ここはこの色でなくてはならない、そこはこういう線でなければならないという必然性はまぎれもなくある。だから、描きかけの画面のなかのある色を別の色に置き換えたら全体をそっくり描きなおさないといけないことになってしまう。そしてこれしかありえないという必然性を追うなかで絵はやっと描き終わる。しかしその画業の意味を問われても答えようがない。画家の元永定正はじぶんの作品について「これは何ですか？」と問われるといつも、「これはこれです」と答えるのだという。そういう意味では、曖昧なものを曖昧なままに正確に表現する、一箇所もゆるがせにしないで、正確に、これしかないという表現へともたらずこと、これが画家の力量である。

このように、政治、ケア、描画のいずれにおいてももっとも大事なことは、わからないもの、正解がないものに、わからないまま、正解がないまま、いかに正確に処するかということである。そういう頭の使い方をしなければならないのがわたしたちのリアルな社会であるのに、多くの人はそれとは反対方向に殺到する。わかりやすい言葉、わかりやすい説明をもとめるのだ。だがほんとうに大事なことは、困難な問題に直面したときに、すぐに結論を出さないで、問題がじぶんのなかで立体的に見えてくるまでいわば潜水しつづけるということである。知性に肺活量をつけるというのはそういうことである。目の前にある二者択一、あるいは二項対立に晒されつづけること、対立を前にして考え込み、考えに考えてやがてその外へ出ること、それが思考の原型なのに、そうした対立をあらかじめ削除しておく、均^{なら}しておくというのが、現代、人びとの思考の趨勢^{すうせい}であるようにおもえてしかたがない。哲学はこういう趨勢に抗って、知性のそういう肺活量を鍛えるものである。

ひとは、思いどおりにならないもの、理由がわからないものに取り囲まれて、苛立ちや焦り、不満や違和感で息が詰まりそうになると、その鬱^{ふさ}ぎを突破するために、じぶんが置かれている状況をわかりやすい論理にくるんでしまおうとする。その論理に立てこもろうとする。わからないものをわからないまま放置していることに耐えられないからだ。だから、わかりやすい物語にすぐに飛びつく。

[ア],ほんとうに大事なことは、ある事態に直面して、これは絶対手放してはならないものなのか、なくてもよいものなのか、あるいは絶対にあってはいけないものなのか、そういうことをきちっと見極めるような視力である。そのためには、たとえば目下のじぶんの関心とはさしあたって接点のないような思考や表現にもふれることが大事だ。じぶんのこれまでの関心にはなかった別の補助線を立てることで、より客観的な価値の遠近法をじぶんのなかに組み込むことが大事である。

(鷲田清一『哲学の使い方』、岩波書店、2014年、pp.63-68より、一部改変)

問 1 下線部(1)～(3)を漢字で書きなさい。

問 2 空欄[ア]に入る接続詞を、下の から 1 つ選びなさい。

たとえば	また	だが	つまり
------	----	----	-----

問 3 下線部(A)について、作者が「このような思考には、いってみれば大きな肺活量が必要」と考えている理由を本文中の言葉を用いながら 150 字以内で説明しなさい。

問 4

- (1) 課題文を踏まえ、作者が 3 つの思考を例に挙げて伝えたかったことはなにか、200 字以内で記載しなさい。
- (2) 上記の内容に対する具体的な例を挙げ、あなたの考えを 300 字以内で述べなさい。